



青の恐怖・鷺尾三郎

鷺尾三郎



青樹ミステリー

青の恐怖

昭和三十八年十月十日 印刷
昭和三十八年十月十五日 発行

定価 三五〇円

著者 鷺尾三郎

発行人 土井 勇

印刷人 山森忠一

発行所 青樹社
有限会社

東京都千代田区
神田神保町二ノ一八
電話 〇五四五番
振替東京四七六四八

― 落丁・乱丁本はお取替先致します ―

目次

恐るべき偶然……………	七
ナイトクラブの女……………	二六
邪魔者は殺せ……………	二六
来訪者……………	三六
疑心暗鬼……………	四〇
蒼い黴たち……………	四〇
殺し屋……………	七三
後悔のない男……………	八五

殺人計画……………	六
裏切り……………	一六
抱き込み……………	二八
非常手段……………	三〇
地獄特急……………	三四
雪崩……………	三五
播かぬ種は生えぬ……………	三六

青
の
恐
怖

恐るべき偶然

春——そして夜だ。盛り場には湿気を含んだ微風が吹いていた。その風にはすえたようなにおいがあつた。何かの危険を暗示するような、血なまぐさいにおいとも感じられた。内田真吉はそのにおいを親しむように嗅ぎながら酒を飲んでいた。

真吉はウイスキーのコップから眼をはなすと、小棚の上の眼ざまし時計を見た。

十時二十分だ。約束の時間からは二十分も過ぎていた。十時には弁野克巳がオーバを質入れして、三千円の金をこしらえて持つてくることになつていた。もつとも、オーバは弁野の品物で、舶来のパイルの上物だつた。質屋はそれで五千円を貸し、そのうちの千円で内田のスリーシーズンをうけ出して、それを弁野が着ることで話合いが出来ていた。

真吉は一口飲んでから、もう一度時計を見た。店の親父は無愛想な苦い顔をした。それで彼は急に酒がまずくなつた。もともとウイスキーといつても、名ばかりの酒で、すぐに頭へくるしる物だつた。しかし、彼はこの店にも、三月まえからの勘定が三千円あまりたまつていた。

この店は親父と娘が二人きりでやつていた。場所は新宿駅の裏通りのはずれにあつた。親父は真吉たちと同じ新潟の人間で、最初にこの店を見つけたのは弁野だつた。娘の布沙は顔一面にソバカスが散つていたが、その一つ一つが数えられるほどに色が白かつた。弁野は布沙をものにしうと思つて一月あまり通いつづけた。しかし、布沙をものにしたのは真吉のほうが早かつた。真吉も布沙もそのことは弁野に秘密にしていた。だが、親父は娘の素振りで、うすうすそれに感づいていた。親父は弁野の生家が「大源」という新潟の有名な質屋であることを知つていたが、真吉の家が沼垂の町はずれにある外科医であることを知らなかつた。だから、布沙の軽はずみを後悔していたし、真吉がいつも文なしであることにもよつたが、彼が店へ来ることに、親父はあまりいい顔をしなかつた。

十時半だ。しかし弁野はまだやつて来ない。

(ぐそッ。弁野の奴、俺に一杯食わせやがつた)

彼は急にはげしい憤りを覚えた。彼が手荒く空のコツプをスタンドへ置いた時、外から布沙が店へはいつてきた。

「はい。タバコ」

彼女は「みどり」の紙包を一旦真吉のまゑに置いてから、封を切つて中の一本を取出すと、口にくわえて火をつけて、口紅のついたままを彼に渡した。布沙は真吉の憂えを帯びた冷い容貌に、激しい愛着を感じていた。

「弁野さん。来なかつたの？」

布沙がいつた。

「三十分も待ちボケを食わせやがつた」

「質屋へ電話してみたら？」

「いや。そんなことは無駄さ」

「お金はいつたから、どつか近くで飲んでいるんじゃない？」

タバコを口まで持つていつた真吉の手が途中でとまった。

（そんなことかもしれんな）

彼は頭の中で、二三軒の飲屋の名を思いうかべた。するとそれが本当らしく思われてきた。

「電話をかけてくる」

彼は床几から尻を浮かした。

「もう一度戻つてきてくれるわね？」

布沙は哀願するように甘えた声でいつた。その金がいつたら、布沙は今夜は久しぶりで、真吉に抱かれて寝るつもりでいたのだ。

「うん」

ど、あいまいな返辞をしておいて、真吉はそこへ入つてきた二人の客といれ違いに外へ出た。

あいにく、気まぐれな春の夕立がパラパラと降つてきた。店屋はほとんど閉まつていて、赤電話がどこにも見つからなかった。真吉は軒伝いに走つた。

古本屋がポツンと一軒だけ店を開けていて、門口に赤電話が置いてあつた。ケースの上の月おくれの古雑誌が雨に叩かれたままだつた。彼は飛び込むようにして軒下へ入ると、大きく息を吸い込んでから、電話のダイヤルを廻した。話中の信号音が聞えた。夕立は一層はげしくなつた。

（弁野の野郎。しょうのない奴だ。どうでも今夜は奴を見つつけ出して泊り込まなけりや、俺は行く所がないんだ）

真吉はみじめな自分自身を振り返えつた。彼は今朝アパートを出る時に、管理人のおかみさんがいつた言葉を思い出した。

「内田さん、ご存知のように、お部屋代が三月分も溜つているんですの。今日中にたとえ一月分でも入れていただけないようなら、今夜にでも早速引越していただきたいんです。お願いしますわね。お部屋さえ空けてもらえば、部屋代をきちんと払つてもらえる借手はいくらでもあるんですからね」
冷い癪にさわる挨拶だつた。

「すみません。今日は当てがありますから、多分お払いが出来ると思います」

彼はそういつてアパートを出た。もちろん当てなどあるう筈がなかった。彼が唯一のたよりにして、こつと手すり裏うごつこバ、あゝこく皮もンナていた。

真吉は去年の春新潟市の高校を卒業すると、上京して××大へ入学した。彼の父は医者だつた。彼には結婚した姉と、二人の弟があつたが、姉と彼とは弟たちの母とは腹違いだつた。彼の実母は彼が三才の時に亡くなつて、その当時医院に勤めていた看護婦が父の後妻になつた。義母は彼や姉には冷淡だつたし、時には冷酷でもあつた。だから彼と姉とは、ことごとに義母と衝突した。姉は生家を逃れるようにして、あるサラリーマンと結婚した。父は彼を新潟大学へ入学させて医家を継がせるつもりだつた。しかし、彼も生家から逃避することを望んだ。そして医者嫌つた彼は、父の意に逆つて独断で××大の工学部へ入学した。父はやむなく学資と生活費とで毎月七千円を送金して、不足分は彼がアルバイトで稼ぐという条件で、彼の遊学を許可した。東京には彼の亡母の弟が、ある官庁の吏員をしていたから、その家で下宿することになつていた。ところが、彼とつしよに××大の経済学部へ入学した弁野克巳と今村雅也が、ほとんど毎日のように彼の下宿へ遊びに来た。連中は学校をサボつて、今村の運転免許証でドライブをやつたり、青山のボーリングセンターで一日中遊びに耽けるか、でなかつたら、彼の部屋へ酒とマージャンを持ち込むと、いつづけしてのらくらと遊び暮した。その家にはちやうど勉強ざかりの中学生の兄妹がいたから、両親はなまけ者の悪影響を恐れて、真吉が下宿をかかわるように圧力をかけた。彼は二学期からいまの頃、アパートへ移つた。当然生活費がかさんで、七千円では暮しのあがきが取れなくなつた。彼は父に懇願して、仕送りの金額を一万円にしたららう。しかしその金はほとんど遊興費に消費されて、弁野と今村とは、どちらにも一万円あ

ての借金が出来ていた。一万円の送金は質屋の利息と、飲屋への内金とで、大半が消費されていた。とにかく、三人でなんとか遺繰りをしさえすれば、どうにかその日が暮して行けた、それがかえつていけなかつたのかもしれない。学校へはほとんど出なかつたが、籍がある以上は学生に違いなかつた。しかし、ただそれだけのことで、三人の素行は学生とはいえないものだつた、博徒や愚連隊までには墮落してはいなかつたが、その一歩手前の与太公というのにぴつたりだつた。少年としての純真さがなく、青年としての責任感のない、中途半端なハイティーンという年頃が、一歩あやまれば取返しのない犯罪を犯す危険な状態に彼等を追い込んでいた。とりわけ家庭のあたたか味を知らない真吉の心は自暴自棄に近いまでですんでいた。彼は金が欲しかつた。酒に酔つて、布沙のほずみのある乳房をまさぐりながら、強暴な欲情のままに彼女の強靱なからだを征服することが、いまの彼には唯一の生きる楽しみだつた。

真吉はもう一度受話器をとるとダイヤルを廻した。こんどは話中でなく、相手を呼出す信号音がきこえていたが、早じまいをして寝てしまつたのか、相手はなかなか電話へは出てこなかつた。雨はいつの間にか土砂降りになつて、軒端から落ちる滝のような雨垂れが、ケースの上に竝べた古雑誌の上に容赦なく降りそそいでいた。細長い店構えの真中には、背中合わせになつた本棚が二列に竝べてあつて、中央の通路の正面には、店番をする家人が坐る番台があつたが、そこには人の姿が見えなかつ

気配も見えなかつた。

（おかしいな。家に誰もいないのかしら）

真吉は妙にそれが気にかかつた。その時やつと電話に相手が出た。

「もし、もし。矢田質店ですか？」

「そうです」

「僕、内田真吉ですが、弁野が今夜お店へ伺いませんでしたか？ 今夜あなたのほうへ行くことになつていたんですね」

「いや、弁野さんはいらつしやいませんでしたよ。何かご用事なんですか？」

「いや、それならいいんです。ご面倒かけました」

真吉は急いで受話器をかけた。利息の催促なら御免だ。

（くそッ。弁野の奴、俺をうまくベテンにかけやがつた）

彼は唇を噛みしめたまま、沛然と軒端を叩く滝のような雨を、いまいましそうにながめていた。当てにしていた三千円の夢が呆気なく消え去つた。

（仕方がない。これから奴の下宿へ押しかけよう）

しかしこの雨では、一步も外へ出られなかつた。彼は古本でもひやかしながら、小止みになるまでここで、雨宿りをしようと考へた。すでに通りの店屋は残らず戸を閉ざしていて、ネオンのあかりも

激しい雨に曇つて、通りはうす暗く、人の往来も跡絶えていた。店頭の新雑誌を並べたケースは雨びたしで、どの雑誌もビシヨビシヨに濡れていた。

（どうしたんだろう。誰もいないのかな）

真吉はいぶかしく思いながら、本棚の間を伝つて奥のほうへはいつていった。彼は番台のそばまで近寄ると、ふとすりガラスの内側から、かすかな呻き声が洩れてくるのを聞いた。彼は思わずハツとしてきき耳を立てた。

（おや誰かいるらしい。どうしたのかな）

その声は断続した男の、苦悶に喘ぐ呻き声だつた。彼は咄嗟に激しい疑惑を感じると、番台のそばからからだを伸び上らせるようにして、半開きになつたガラス障子の内をのぞいた。四畳半の部屋の中あたりに胡麻塩頭の店主らしい男が俯伏せに倒れていて、からだの下からおびただしい血が畳の上に流れていた。真吉は意外な光景に思わずギョツとなつた。一度はその場から逃げ出そうとした彼は、ふと倒れている男のそばに、口を開いた手提金庫があり、千円紙幣の束がその中からのぞいているのに気づくと、大きく唾を呑み込んでそこに棒立ちになつた。

（喧嘩か？ いやそうじゃない）

血と金が、はつきりと彼の頭の中に、この事件の答えを暗示した。彼はつかれたように靴を脱ぐと、座敷へ上つた。